

# 羊羹色について

## —なぜ衣類に限られるのか—

村中 淑子  
桃山学院大学  
tmuranaka@andrew.ac.jp

### The Color Term “Yokan-Iro” (the Color of Sweet Bean Jelly) : Why Is It Almost Exclusively Used in Clothing?

MURANAKA Toshiko  
St. Andrew's University

*Keywords: Color Names, Unclear Dark Color; Deterioration of Fabric, Simile*

#### 要旨

「羊羹色」をコーパスで検索したところ、衣類を形容する場合がほとんどであった。なぜそのように形容範囲が限られるのか。具体物への比喩から生じた色名は「チョコレート色」のように自然物・人工物を広く形容できるものと「羊羹色」のように形容対象が狭く限定されるものとに分けられそうだ。形容対象が狭く限定される原因の1つは、色名の元になった具体物の性質やイメージに求められる。「羊羹色」は、羊羹という具体物の色が中間的で彩度・明度が低いことと、必ずしも均質でなく半透明で奥行きがあるように見える羊羹の質感が黒系の布地の経年変化の印象につながり、それが固定化したと考えた。

#### 1 はじめに：色名と比喩

「羊羹色」とは「羊羹のような色」であり、羊羹にたとえて色を表した語である。

色の名は、何かにたとえて色を表した語が多い。「そらいいろ」は「晴れた大空のような色」であり、「きつねいろ」は「狐の毛のような色」であり、「さくらいろ」は「桜の花びらのような色」である。それぞれ、晴れた空、狐の毛、桜の花びら、にたとえて色を表している。このように、「○○色」には、「○○のような色」というタイプの、比喩表現に基づく語が多く存在する<sup>1</sup>。

多門（2011）によれば、「比喩」は、「ある表現対象について、それを当該文脈において字義通りかつ過不足なく表す表現を通してではなく、別の表現に置き換えて表す表現」である<sup>2</sup>。「XのようなY」はいわゆる直喻であり、類似性に基づく比喩である。「Xのよう

なY」は、通常はYを説明するためにそれに類似したXを提示する。そうすると、Yの説明が一言で済み、簡便である。Xには、よく知られていて人々がイメージを思い浮かべやすいものが選ばれる。Xそのものをよく知らなかつたり、見たことがなかつたりしても、イメージが人々に共有されていると想定できれば差し支えない。

「XのようなY」のXとYには、それぞれ様々なものが入りうる。その中で、Yが具体的な事物を指す語ではなく、五感（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）に関する要素を表す語となるものがある。すなわち、Xのような色、Xのような形、Xのような音、Xのような声、Xのような匂い、Xのような味、Xのような手触り、Xのような痛み、Xのような動きなどである。これらは、Yそのもの（すなわち色というものの、形というものの、音というものの、声というものの、匂いというものの等）がXに似ているのではない。

これらの場合の比喩関係を考えると、「XのようなY」ではなく、「XのようなYのZ」が完全な形である。XとYとの間に類似性があるのではなく、Zという事物のY要素に関する性質が、Xという事物のY要素に関する性質と、類似しているのである。たとえば「レモンのような色のセーター」であれば、そのセーターという事物の、色に関する性質が、レモンの色の性質に似ている。あるいは「釣鐘のような形の花」であれば、その花の、形に関する性質が、釣鐘の形の性質に似ている。あるいは「カレーのような味のスナック」であれば、そのスナックの、味に関する性質が、カレーの味の性質に似ている。

そして、これらのうちの一部は、「XのようなY」を縮めて「XY」という一語になり、複合名詞が作られる。すなわち、「レモン色」「釣鐘形（釣鐘型）」「カレー味」という語になる。

このことを図式化すると、次のように表すことができる。

**【通常の場合】**

- $X \approx Y \rightarrow 'X\text{のような } Y'$

(XとYが類似のものと感じられる場合、「XのようなY」という表現が成立する。)

**【Yが五感に関する要素を表す場合】**

- $X \text{の } Y \approx Z \text{の } Y \rightarrow 'X\text{のような } Y\text{の } Z' \rightarrow 'XY\text{の } Z'$

(ある事物ZのY要素が、XのY要素と類似のものと感じられる場合、「XのようなYのZ」という表現が成立する。さらにXYという複合名詞が形成されて「XYのZ」という表現が可能になる場合がある。)

例： そのセーターの色がレモンの色と類似していると感じられる  
 → 「レモンのような色のセーター」という表現が成立する  
 → 「レモンいろのセーター」という表現も可能

このように、「XのようなY」という比喩表現において、Yが五感に関係する要素であり、そのYが「いろ（色）」である場合は、「Xいろ」という複合名詞が形成され<sup>3</sup>、「XいろのZ」という表現が生まれる。

村中（2023）では「Xいろ」という複合名詞のひとつである「チョコレート色」について調べている。コーパス検索の結果、「チョコレート色」は、洋服や車両や建物などの人工物、および、花、岩、動物、人間の体などの自然物の形容に使われていた。本稿では、チョコレートと同様、一般的におやつとして食されたり手土産として用いられたりする「羊羹」に由来する「羊羹色」という色名を取り上げ、特徴について考察する。

## 2 辞書とコーパスにみる「羊羹色」

### 2.1 『日国』による「羊羹色」

北原・久保田・谷脇・徳川・林・前田・松井・渡辺『日本国語大辞典第2版』（2000）によれば、「羊羹色」は「ようかんいろ」と読み、「黒色、紫色などの色があせて、赤みを帯びたものをいう。」とある。用例の出典として「浮世草子・好色小柴垣」（1696）、「淨瑠璃・妹背山婦女庭訓」（1771）、「滑稽本・八笑人」（1820-49）、田山花袋「田舎教師」（1909）が挙げられている。つまり「羊羹色」という語は江戸時代から存在しており、明治時代にも使われていた。

### 2.2 コーパスにおける「羊羹色」の出現状況と形容対象

コーパスを検索し「羊羹色」の出現状況を見た結果を表1に示す。名詞「ようかん」と名詞「いろ」の表記のありうる組み合わせをできる限り網羅的に検索した<sup>4</sup>。

表1 コーパスにおける「羊羹色」の出現について

	羊羹色	ようかん色	羊羹いろ	ようかんいろ	計
日本語歴史コーパス <sup>5</sup>	3	0	0	1	4
青空文庫パッケージ <sup>6</sup>	56	4	2	0	62
現代日本語書き言葉 均衡コーパス <sup>7</sup>	3	0	0	0	3

「日本語歴史コーパス」は時代を限定せずに検索したが、得られた用例は明治時代のみであり、著者は内田魯庵、仮名垣魯文、永井荷風の3人であった。

「青空文庫パッケージ」の用例の著者は、森鷗外、田山花袋、岡本綺堂、与謝野寛、泉鏡花、佐藤紅緑、野村胡堂、北大路魯山人、下村湖入、中里介山、石川啄木、夢野久作、直木三十五、芥川龍之介、江戸川乱歩、宮沢賢治、壱井栄、中島敦、太宰治、新美南吉、など多数に及ぶ。特に用例が多いのは野村胡堂で25例にのぼることから（うち20例の出典が錢形平次捕物控），大衆文学的な表現なのかとも思われるが、この著者たちの多様さ

を見ると、純文学か大衆文学かに関わらず、明治から昭和にかけての主だった小説家が「羊羹色」という表現を用いていたとみてよいだろう。

現代日本語書き言葉均衡コーパスの検索で得られた用例の著者は滝野文恵と芦辺拓の2人のみであり、出版年はそれぞれ1993年と2001年であった。

以上の結果から見ると、「羊羹色」は江戸時代に始まり、明治・大正・昭和の文学においてよく使われ、平成以後はやや廃れ気味なのかとも推測される。

次に、コーパス検索結果において「羊羹色」が形容していた対象を分類し表2に示す。

表2 コーパスにおける「羊羹色」の形容対象

	和服	洋服	帽子	布切	その他	計
日本語歴史コーパス	3	1	0	0	0	4
青空文庫パッケージ	37	20	2	0	3	62
現代日本語書き言葉均衡コーパス	1	0	0	2	0	3

表2からわかる通り、「羊羹色」が形容する対象は、95%以上が布製品であり、そのほとんどが和服もしくは洋服であった。

日本語歴史コーパスの4つの用例を発行年順に示す。以下の用例では「羊羹色」に下線を引き、形容対象を四角で囲んだ。用例の後ろの括弧内は、著者名、発行年、作品名である<sup>8</sup>。

- (1) どす黒い顔、青白い顔、痩せこけた貧相な顔、頬の尖つた險相な顔、膩光りのした綻びかかつた洋服、ベタベタした羊羹色の羽織、張紙の凹んだやうな帽子、どれを見ても飢餓じさうな男が寒むさうに洋服の襟を立て首を縮めてぞろぞろと三々五々組を作つて急ぎ足に行く。(内田魯庵、1868、「丸之内」)
- (2) 廉藏の實家の兄の寄居周作が古ぼけた無恰好の羊羹色のフロツクコートに纏まつて村夫子然と控へたる外は、何れも流行の華奢を盡してゐた。(内田魯庵、1868、「投機」)
- (3) どくにもならぬど可もなく不可もなき開化不用の人物としごろは五十あまりようかんいろの四字すぎたるべんべらばをりにまがひ八丈のきいろへくろみのかかりたる小そで下着なしのねづみかあさぎか(仮名垣魯文、1872、「安愚樂鍋」)
- (4) 何しろ呉山は午飯をすませば毎日雨が降らうが風が吹かうが大きな信玄袋に羊羹色になつた五所紋の羽織と張扇を入れて晝席へ出て行き、夕飯頃に歸つて来てすぐ又夜の席へと出掛けねばならぬ。(永井荷風、1879、「腕くらべ」)

このように、日本語歴史コーパスの4つの用例の「羊羹色」が形容するものは、「羽織」が3つ、「フロックコート」が1つであった。

青空文庫パッケージの用例も同様で、和服のほとんどが「紋付」「羽織」であり、洋服はフロックコートやインバネスなどの上着類がほとんどである。衣服の例を挙げる。

(5) たいてい洋服で、それもスコッチの毛の摩れてなくなった鳶色の古背広、上にはおったインバネスも羊羹色に黄ばんで、右の手には犬の頭のすぐ取れる安ステッキをつき、柄がない海老茶色の風呂敷包みをかかえながら、左の手はポケットに入れている。

(田山花袋、1907、「少女病」)

(6) 浪人といつても、羊羹色の黒羽織などを着ているのではなく、なかなか立派な風をしていたそうです。(岡本綺堂、1926、「青蛙堂鬼談」)

(7) 「暮から何千両と稼いた曲者が、喰い詰め者らしく何時までも羊羹色の紋附は變な裝束だな」「それは仕事着だよ、錢形の、職人の袢纏と同じことだ。夜盗や押込みが、金襷緞子も着飾つては行けまいぢやないか」(野村胡堂、1948、「錢形平次捕物控 181 頬の疵」)

帽子を形容した用例は次のものである。四角で囲った部分が形容対象であり、それぞれ、ソフト帽、中折れ帽の略であろう。

(8) 途で乞食のやうな風體をしてゐる人に出逢つた。羊羹色もところ斑らになつた古ソフ  
ト被つてゐた。色のうすはげた淺黃の大風呂敷で何かを背負つてゐた。(阿部次郎、1915、「三太郎の日記 第三」)

(9) 其の男は背が人並外れて高かつたばかりではなく、その風采が、また著しく人目を惹くに足るものだった。古い羊羹色の縁の、ペロリと垂れた中折を阿弥陀にかぶつた下に、大きなロイド眼鏡—それも片方の弦が無くて、紐がその代用をしている—を光らせ、汚点だらけの詰襟服はボタンが二つも取れている。(中島敦、1942、「虎狩」)

以上のように、「羊羹色」のほとんどの用例は衣類を形容するものであるが、例外的なもの、すなわち布製品でないものを形容した用例が3つあった。1つは、美食家の北大路魯山人が、マグロのトロではない赤身の色を形容したものであった。あとの2つは、SF作家・推理作家の蘭郁二郎の作品で、「闇」「夜空」を形容したものであった。

## 2.3 コーパスにおける「羊羹色」の共起表現について

前節ではコーパスにおける「羊羹色」の出現数と、いくつかの用例を見た。本節では、それらの「羊羹色」の前後にどのような表現が頻出するか、すなわち、「羊羹色」の共起表現について観察し、羊羹色の性質について考える。

前節で見たように、「羊羹色」は和服や洋服の色を形容する場合が圧倒的に多いのであるが、その衣服そのもの、あるいはその衣服を着た人物の風采がみすぼらしい様子を描写したケースが多い。

先にあげた用例(1)は、多くの人間の中の一人が羊羹色の羽織を着ており、それらの人々をまとめて「どれを見ても飢餓じさうな男が寒むさうに」と記している。ひもじそうで寒そう、つまり貧しそうなのである。(2)は「古ぼけた無恰好の」とあり、立派な風采でない上に、「村夫子然と控へたる」という描写から一定の教養はあるが田舎くさい感じであることもわかる。(3)の「べんべらばをり」は、薄っぺらい安物の粗末な羽織である。(5)は「毛の摩れてなくなった鳶色の古背広」「頭のすぐ取れる安ステッキ」とあり、姿全体が貧相である。(7)は「喰い詰め者らしく」(9)は「古い」とある。

前節に挙げた用例以外にも、「あんな羊羹色のフロツクしか無い」や「羊羹色のひどい紋附」や「羊羹いろでぼろぼろで」などの表現が見られ、貧相でパッとしない、みっともない様子がうかがわれる。

また、(4)に見られるように、衣服が「羊羹色になった」という表現もよく見られる。(5)では「羊羹色に黄ばんで」とある。これらは、その衣服が最初から羊羹に似た色だったのではなく、経年変化の結果として羊羹に似た色になったことを表している。つまり、羊羹色はただ単に小豆を煮て作った餡を固めた色を表しているのではなく、服の布地が年を経て劣化して傷んでいる様子、色が褪せてくたびれた印象を表しているのである。その瞬間の色だけを切り取って表したのではなく、時間の経過をも含んだ意味合いがあるのである。

## 3 「羊羹色」はどんな色なのか

### 3.1 色彩語辞典における「羊羹色」

色彩語の辞典を調べたところ、「羊羹色」を掲載しているものは少なかった。

『色の手帖』(1986)には358色の色名とその色見本が載っているが、「羊羹色」はない。それを土台にした『新版 色の手帖』(2002)には500色が載っており、由来による色名分類も行われていて、飲食物に由来する色名も掲載されているが、やはり「羊羹色」はない。『色々な色』(1996)の530の色名にも、『色名事典』(2005)の300色にも、『増補改訂版 色の名前事典519』(2023)の519色にも、「羊羹色」は見えない。

福田(2018)『忘れられ失われた奇妙な色を追ってI』には、「羊羹色」が菓子類に由来する色名として言及されている。しかし色合いについての説明はなく、色見本や色を表す数値などもない。

天野（1980）『色名綜覧』には「羊羹色」が掲載されている。「色相」は「赤紫」であるが「明度・彩度の表示不能のもの」とされており<sup>9</sup>、「薄き赤味ある紫黒色なり」と記されている。

丸山（2012）『日本史色彩事典』には「ももしおちゃ（百入茶）」の解説の中に「羊羹色」がある。「羊羹色は色名では、菓子の羊羹の色のような暗い紫褐色をいい、百入茶と同色である。」「それとは別に、僧侶の墨染の色が褪めて赤みを帯びたことを時に羊羹色と形容していることもある。」と記されている。ちなみに「ももしおちゃ」は「赤みの焦茶色で、今日のチョコレート色に近い。」とされている。

内田（2008）『定本 和の色事典』には1052色が掲載されていて、「羊羹色」も載っている。「ももしお茶」の項に、「羊羹色と同じとする説もあるが、それよりも濃い色」とある。「羊羹色」の項には「深く渋い橙」「羊羹のような色。黒や濃紫、鳶色などの衣服の色が褪せてきた様子を表すのに使われた。」と解説されている。また、この文献には文章による説明だけでなく「羊羹色」の性質についての数値表示も掲載されていた。『定本 和の色事典』では、色の性質を「色相番号、色の強さ、濁りの強さ、シアン、マゼンタ、イエロー、ブラック」の項目で数値的に表している。

表3に、「羊羹色」と類似の色との数値表示の比較を示す。Berlin& Kay (1969=2016) の11の基本色名「白、黒、赤、緑、黄、青、茶、橙、紫、桃、灰」の中では、「茶」と「橙」が「羊羹色」に見た目が似ている。また、上記の羊羹色の説明の中に「濃紫が褪せた」とある。さらに、羊羹の主な材料は小豆であるが、小豆色という語がある。よって、『定本 和の色事典』における「羊羹色」と「茶色」「橙色」「深紫」「小豆色」の数値を合わせて表3に示すことにする。（『定本 和の色事典』には「濃紫」の項目がなく、「深紫」の項に「紫色の中で最も濃い色」という解説があったので「深紫」を表に入れる。）

表3 『定本 和の色事典』における「羊羹色」と関連の色

	色相番号 (1~24)	色の強さ (0~100)	濁りの強さ (0~100)	シアン	マゼンタ	イエロー	ブラック
羊羹色	5	70	70	0	53	70	70
茶色	5	90	60	0	68	90	60
橙色	5.5	100	0	0	63	100	0
深紫	21	60	70	45	60	0	70
小豆色	2	60	50	0	60	30	50

色相番号（1~24）は、色相<sup>10</sup>を24等分して表したものであり、24が紅（マゼンタ）、4が赤、8が黄（イエロー）、12が緑、16が青（シアン）、20が紫である。つまり羊羹色の色相番号5というのは、赤と黄の間の、赤に近いものである。

表3から、羊羹色の色相（色み）は茶色と同じであり、橙色とも近いことがわかる。

色の強さという点では、羊羹色は、橙色や茶色より弱く、深紫や小豆色に近い。濁りの強さは、茶色・深紫・小豆色と近い。

羊羹色はシアンが全くなく、マゼンタは茶色・橙色・深紫・小豆色よりやや少なめである。イエローとブラックが共に一定程度あることが茶色と共通である。

まとめると、羊羹色は、黄色みと黒みが混じったところに赤みを少し混ぜた色である。色みは茶色や橙色と非常に近いが、くっきりとした明瞭な感じがやや少なく、暗く濁っている。「羊羹色」と、羊羹の主原料である小豆に由来する「小豆色」とを比較すると、「小豆色」の方が赤みが強く、黄色味が少なく、濁りの少ない色である。小豆が羊羹に加工されたことにより、色あいの印象が変化したことがわかる。

### 3.2 「羊羹」のイメージと表現

前節で見たように、羊羹色は「色みは茶色や橙色と非常に近いが、くっきりとした明瞭な感じが少なく、暗く濁っている」のだが、その羊羹色という色名がなぜ、衣服の色を形容することにのみ用いられるのか。また、なぜ服の布地が年を経て劣化して傷んでいる様子を表すのか。

それを考えるために、「羊羹色」の由来となっている「羊羹」がどのような印象を持つものであるかを、夏目漱石と谷崎潤一郎の文章を参考を見てみる<sup>11</sup>。

まず、夏目漱石の「草枕」の一節を引用する

菓子皿のなかを見ると、立派な羊羹が並んでいる。余はすべての菓子のうちでもっとも羊羹が好きだ。別段食いたくはないが、あの肌合が滑らかに、緻密に、しかも半透明に光線を受ける工合は、どう見ても一個の美術品だ。ことに青味を帯びた煉上げ方は、  
玉と蟻石の雑種のようで、はなはだ見て心持しがいい。のみならず青磁の皿に盛られた青い煉羊羹は、青磁のなかから今生れたようにつやつやして、思わず手を出して撫でてみたくなる。（夏目漱石「草枕」初出 1906）

「青味を帯びた」と書かれているところを見ると、この文章で描写されている羊羹はいわゆる「羊羹色」の茶色や橙色に近い色みではないように思われるが、色合いと質とに関係するところに注目しよう。「半透明に光線を受ける工合」「玉と蟻石の雑種のよう」とある。これはつまり、羊羹の色あいが、単調で均質で平板なものではなく、細かく混じり合った色から成る複雑なものであることを示していると考えられる。

次に、漱石の「草枕」の描写に言及している谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」を引用する。

かつて漱石先生は「草枕」の中で羊羹の色を讃美しておられたことがあったが、そう云えばあの色などはやはり瞑想的ではないか。<sup>ぎょく</sup>玉のように半透明に曇った肌が、奥の方まで日の光りを吸い取って夢見る如きほの明るさを啞んでいる感じ、あの色あいの深

さ、複雑さは、西洋の菓子には絶対に見られない。クリームなどはあれに比べると何と云う浅はかさ、単純さであろう。だがその羊羹の色あいも、あれを塗り物の菓子器に入れて、肌の色が辛うじて見分けられる暗がりへ沈めると、ひとしお瞑想的になる。人はあの冷たく滑かなものを口中にふくむ時、あたかも室内の暗黒が一箇の甘い塊になって舌の先で融けるのを感じ、ほんとうはそう旨くない羊羹でも、味に異様な深みが添わるよう思う。（谷崎潤一郎「陰翳礼讃」1933）

谷崎は羊羹の色について、「玉のように」「半透明に曇った」「色あいの深さ、複雑さ」と述べている。ここまでは漱石と似ている。さらに谷崎は「奥の方まで日の光りを吸い取って」という。これは、羊羹の色合いに奥行き感があることを示しているのだろう。さらに「口中にふくむ時、あたかも室内の暗黒が一箇の甘い塊になって舌の先で融ける」と、色あい（暗黒）と味（甘い）と舌触り（舌の先で融ける）を一文の中で同時に表現している。ここから、黒っぽい色が甘美に快く溶けていく感触、すなわち黒色がやわらかく変化していく様子が羊羹に結び付けられていることがうかがわれるのである。

#### 4 考察

「羊羹色」の使用実態をコーパス検索で調べたところ、2節で見た通り、和服もしくは洋服の色を形容する場合がほとんどであった。しかもただ色あいを表しているだけでなく、その衣服が傷んでいる様子、あるいはその衣服を着た人物の風采が上がらない様子を表す場合が多かった。これはなぜなのだろうか。

「羊羹色」は、羊羹という物体にたとえて色を表す語である。辞典類によれば、「羊羹色」の色あいは茶色に近いが、明瞭さが少なく濁りが強い。

ただし3.1で見た通り、「羊羹色」を掲載した色名辞典類は少ない。具体的には、『色の手帖』（1986）、『新版 色の手帖』（2002）、『色々な色』（1996）、『色名事典』（2005）、『増補改訂版 色の名前事典 519』（2023）の5冊に「羊羹色」の記載がない。これは「羊羹色」がただ単純に色だけを表す語ではなく、複雑な性質を含む語だからではないか。ちなみに羊羹の主原料である小豆の色を表す「小豆色」は、この5冊の辞書すべてに記載がある<sup>12</sup>。「小豆色」の場合は、小豆の質感などとは関わりなく、色を表す語としての性質を持っているのであろう。「羊羹」の主原料は小豆であろうが、小豆を煮て砂糖を加えて餡を作り、長い直方体に柔らかく固めた物体に仕立てた時点で、赤みが減り、濁りが増え、中間的でやや曖昧な色となっただけでなく、質感が変わる。「羊羹色」は、羊羹の質感も活用し、色あい以外の性質も含意することばなのである。

「羊羹色」の由来である「羊羹」の質感やイメージについては、3.2で見た夏目漱石と谷崎潤一郎の羊羹についての描写が参考になる。羊羹が単純ではない複雑な色あいを持ち、半透明で奥行き感もあること、さらに黒っぽい色が柔らかく変化していく様子も感じさせること、が示唆された<sup>13</sup>。

以上と合わせて、次のように考えた。

A：服装描写の機会の多さについて

人の印象を表現する際、顔立ちや顔の表情、体型や姿勢だけでなく、服装を描写することが多い。服装は人の見た目に占める面積が一定程度あるので目に入りやすい上に、どんな服装をしているかで人柄や態度を推測することができるので、人の印象を表現する場合に服装の描写を行うことが多くなるのである。

B：服装描写において対象となる部分について

服装を描写する際には、服の形・タイプ、布地の色と状態、などを表現することになる。服装全体のうち、外から見えやすいのは上に着ているものである。和服であれば羽織の類、洋服であればコート類である。帽子も目につきやすい。

羽織・コート類や帽子の色として、黒っぽいものはよく見られる。黒っぽい布は染められたものであり、染め色は経年変化で褪せるものである。

C：描写に用いることばについて

「羊羹」は黒っぽさの中に一様ではない複雑な奥行きのある色みとやわらかな変化的印象を持つ。「羊羹」をたとえに使った語である「羊羹色」は、茶色に近いが中間的で濁りの強い色を表すだけでなく、そのような羊羹の質感のイメージを表現することばである。

A・B の通り、上に着ている衣服類（羽織、上着の類や帽子など）の黒っぽい布地が色褪せた様子を描写する必要性が生じ、それがCで述べた「羊羹」の性質・イメージと結びつき、「羊羹色」の使用に結びついたのであろう。そのような表現が文学作品で度重なることにより、「羊羹色」と「黒系の布地の色褪せた様子」との結びつきが強まり、「羊羹色」の使用パターンが固定化したのであろう。

## 5 おわりに

以上、本稿では「羊羹色」の使われ方と特徴について考察した。

具体物への比喩から生じた色名は、「チョコレート色」のように自然物・人工物を広く形容できるものと、「羊羹色」のように形容対象が狭く限定されるものとに分けられそうである。形容対象が狭く限定される原因是、色名の由来となった具体物の性質・イメージに関係がありそうだ。今後さらに、同様の色名についての考察を深めていきたい。

## 注

<sup>1</sup> 比喩によらない色名もある。たとえば「茶色」は「茶に似た色」ではなく茶の葉を蒸して使う茶染の色であり、「朱色」は「朱に似た色」ではなく「朱」という硫化水銀を主成

分とする顔料の色である（永田 2002）。つまり「茶」も「朱」もいずれも色のもとになる物質そのものであって、類似性に基づく色名ではない。また人名に由來した色名（例：芝翫茶）や地名に由來した色名（例：新橋色）は、その色の流行の発信者や発信地から名付けられたもので、やはり類似性に基づく色名ではない。色彩の世界では具体的な事物の名前に「色」をつけた名前のことを「固有色名」と呼んでいて、比喩に基づくという見方はされていないようである。固有色名のうち比較的よく知られていると想定される色名を JIS では慣用色名として分類している（『色彩用語辞典』（2003）の「色名」の項、福田邦夫による）。

<sup>2</sup> 「字義通りかつ過不足なく表す表現」とはたとえばある形を表す場合の「中ほどが少しぐびれた長円形」という表現で、この場合の「別の表現」は「瓢箪のような形」あるいは「繭のような形」である（安本（2014）の例による）。

<sup>3</sup> 五感に関係する要素 Y が「いろ」である場合は、XY が「Xいろ」となり、そのままの形態で複合名詞を形成するが、Y が「かたち」や「こえ」である場合は、XY は「X がた」「X ごえ」となり、連濁が起きる。また Y が「おと」の場合は、XY は「X おん」となり、Y が「におい」の場合は、XY は「X しゅう（臭）」「X こう（香）」となって、XY の Y が和語から漢語になる。また Y が「手触り」や「痛み」や「動き」の場合は複合名詞 XY の形にはならない。

<sup>4</sup> 表記をさまざまに組み合わせて検索したが、「ヨウカン」や「ヨーカン」という表記に「色」「いろ」「イロ」という表記が接続したものは出現しなかった。

<sup>5</sup> オンライン検索ツール「中納言」で「文字列検索」をかけた。

<sup>6</sup> 国立国語研究所の山口昌也氏作成『青空文庫』パッケージ（2024年10月3日更新）を全文検索システムひまわりによって検索した。

<sup>7</sup> オンライン検索ツール「中納言」で「文字列検索」をかけた。

<sup>8</sup> 本稿における用例は、国立国語研究所作成の「日本語歴史コーパス」あるいは「青空文庫パッケージ」から検索した結果、得られたものをそのまま用いている。出典に遡って文章を確認することはしていない。

<sup>9</sup> 『色名総覧』において、色相が赤紫で「明度・彩度の表示不能のもの」は、「羊羹色」を含めて 16 個ある。「葡萄染」<sup>えびぞめ</sup>、「杜若」<sup>さくろいろ</sup>、「柘榴色」、「紫檀色」、「薔薇色」などである。

<sup>10</sup> 「色みの種類を表す尺度」を色相という。ほぼ全てのカラーオーダーシステムで用いられる三属性の 1 つである。色相変化は円錐状に並べることができる。色相はその連續的変化が量的変化ではなく質的変化として知覚される連續体である。色相間には大小関係や高低関係が存在しない。（『色彩用語辞典』（2003）より）

<sup>11</sup> ここで夏目漱石と谷崎潤一郎の作品から引用したのは、丹治（2017）の記述を参考にしたものである。

<sup>12</sup> 「羊羹色」の掲載されていた天野（1980）『色名綜覧』、福田（2018）『忘れられ失われた奇妙な色を追って I』、丸山（2012）『日本史色彩事典』、内田（2008）『定本 和の色事典』にも「小豆色」は掲載されている。つまり今回調べた色名辞典類の全てに小豆色は掲載されていた。

<sup>13</sup> 吉村（2006）で「色に時間を見る」感覚が日本人の色彩感覚の中にあると述べているのは本稿の考察に関係が深いと思われる。

### 参考文献

- 天野節, 1980, 『色名綜覧』錦光出版.
- Berlin, B.& Kay, P, 1969, *Basic Color Terms: Their universality and evolution.* CA : University of California Press. (日高杏子訳, 2016, 『基本の色彩語 普遍性と進化について』法政大学出版局.)
- 福田邦夫, 2018, 『忘れられ失われた奇妙な色を追って I 色のロストワールドに分け入る楽しみ』青娥書房.
- 福田邦夫（日本色彩研究所監修）, 2023, 『増補改訂版 色の名前事典 519』主婦の友社.
- 北原保雄・久保田淳・谷脇理史・徳川宗賢・林大・前田富祺・松井栄一・渡辺実, 2000, 『日本国語大辞典 第2版』小学館.
- 丸山伸彦編, 2012, 『日本史色彩事典』吉川弘文館.
- 村中淑子, 2023, 「「チョコレート色」の猫——色名の具体性と抽象化」『現象と秩序』19: 23-33.
- 中村明, 2020, 『類語分類 感覚表現辞典』東京堂出版.
- 夏目漱石, 1906, 「草枕」（集英社文庫『夢十夜・草枕』（1992 初版, 2024 第 26 刷）から引用）.
- ネイチャー・プロ編集室（近江源太郎監修）, 1996, 『色々な色』光琳社出版.
- 日本色彩学会編, 2003, 『色彩用語辞典』東京大学出版会.
- 清野恒介・島森功, 2005, 『色名事典』新紀元社.
- 小学館辞典編集部（永田泰弘監修）, 2002, 『新版 色の手帖』小学館.
- 尚学図書編, 1986, 『色の手帖』小学館.
- 多門靖容, 2011, 「比喩」中村明・佐久間まゆみ・高崎みどり・十重田裕一・半沢幹一・宗像和重編『日本語文章・文体・表現事典』朝倉書店.
- 谷崎潤一郎, 1933, 「陰翳礼讃」（新潮社文庫『陰翳礼讃・文章読本』（2016 発行, 2024 第 9 刷）から引用）.
- 丹治伊津子, 2017, 「谷崎潤一郎の「漱石先生」——廁の陰翳と羊羹の色」『虞美人草』京都漱石の會会報 19: 16-17.
- 内田広由紀, 2008, 『定本 和の色事典』視覚デザイン研究所.

- 安本美典, 2014, 「比喩」佐藤武義・前田富祺編『日本語大事典』朝倉書店.  
吉村耕治, 2006, 「現代日本語の色名の諸相と諸特徴——話名色名の意味の複合性と幽玄の  
美意識」『日本言語文化研究』9: 1-17.

### 使用コーパス

日本語歴史コーパス CHJ 中納言

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/chj/search>

『青空文庫』パッケージ 全文検索システム『ひまわり』

<https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/?%C1%B4%CA%B8%B8%A1%BA%F7%A5%B7%A5%B9%A5%C6%A5%E0%A1%D8%A4%D2%A4%DE%A4%EF%A4%EA%A1%D9%A5%C0%A5%A6%A5%F3%A5%ED%A1%BC%A5%C9%A1%D8%C0%C4%B6%F5%CA%B8%B8%CB%A1%D9%A5%D1%A5%C3%A5%B1%A1%BC%A5%B8>

現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>



\*\*\*\*\*

【編集後記】『現象と秩序』第22号をお届けします。今回も充実の9mm背表紙です。

第1論文は、ろう者の合理的配慮に関する考察であると同時に、多様な人生経験を歩んできたろう者にかんするライフストーリー研究でもあります。「バケツ事件」、「手話サークル」等々の「小見出し」を見て下さい。それだけでも、筆者のインタビューが相互信頼に基づく充実したものであったことがわかると思います。味読すべき内容が書かれています。

第2論文は、日本人が羊羹（色）とどのような「ヒト-モノ-概念関係」を歴史文化的に取り結んで来たのかということに関するコーパス研究です。「羊羹色」はくすんでいることに意味があり、その結果「羊羹色」という色表現は「羊羹色に黄ばんで」と時間の経過をも含んで用いられています。本論文は文化研究の可能性を拓げる論文であるといえるでしょう。

第3論文は、是非オンライン版をカラーでご覧になってください。「きもち翻訳」がどんな風に「オノマトペ」を利用しているのか、「つむおと（みんなとつむぐ音楽会）」がお寺をどんな風にリラックスした空間に変えているのか、一目でわかると思います。著者の南摩周さんは、新進気鋭の人類学者であると共に文化領域における実践活動家でもあります。彼女の実践がおもしろそうだ、とお感じになったら、どうぞメール連絡をしてみてください。関東でも関西でも活動していらっしゃいます。

スペースが尽きかけています。あとは、1行ずつの紹介とします。第4論文は、身体変工への嫌悪感という新しい切り口からのイレズミ論です。第5論文は、「生成AIのハルシネーション」に関する実験研究です。第6論文は、イギリスの障害児者家族に関するフィールドワーク論文です。いずれも、新時代を切り拓く意欲に満ちた本誌らしい論文ですので、どうぞ、読んでの感想を企画編集室にお寄せ下さい。おまちしております。（Y.K.）

\*\*\*\*\*

『現象と秩序』編集委員会（2024年度）

編集委員会委員長：堀田裕子（摂南大学）

編集委員：樋田美雄（摂南大学）、飯田奈美子（立命館大学）、加戸友佳子（摂南大学）

編集協力：村中淑子（桃山学院大学） 編集幹事：大江勇輝（京都産業大学）

『現象と秩序』第22号 2025年3月31日発行

発行所 〒572-8508 大阪府寝屋川市池田中町17-8

摂南大学 現代社会学部 樋田研究室内 現象と秩序企画編集室

電話・FAX：072-800-5389（樋田研）、e-mail：kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848

ONLINE ISSN : 2188-9856

<https://gensho-kashidayoshio.sakuraweb.com/> （←前号から新サイトになりました）

\*\*\*\*\*